

虚時(きょじ)の社(やしろ)

— 蒼太、四月の帰省 —

一 鳥居

四月の風が、相模湾から吹き上げてきていた。雨宮蒼太(あめみやそうた)は二十年ぶりに、小田原の外れの小さな神社の前に立っていた。祖父の一周忌を済ませた帰り道、なぜか足が向いてしまった。

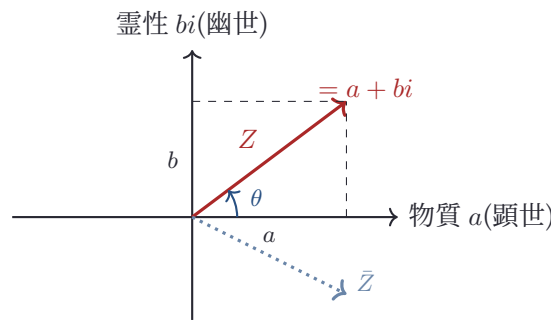
苔むした石段を登りきると、本殿の前に老人が一人、佇んでいた。白いシャツに紺の袴。村でかつて物理学を教えていたという、津久井(つくい)先生だ。子供のころ、夏休みに祖父の家に来ると、よくこの境内で会った人だった。

「久しぶりだね、蒼太君」

「先生、ご無沙汰しております」

「君のお祖父さんは、よくここに来ていたよ。何時間も、ただ静かに座っていた」

蒼太は黙って頭を下げた。父が早くに逝き、祖父までもが昨春に逝った。残された母と妹は精一杯に生きている。それでも、自分のなかの何かが、ずっと迷子になっていた。



〔挿絵一〕 複素平面 — $Z = a + bi$ 、その共役 \bar{Z} は幽世の影

二 横軸ばかりの男

津久井先生はポケットから一枚の紙を取り出し、万年筆で横線と縦線を引いた。

「物理学はね、長らく実数だけで世界を測ろうとしてきた。長さ、重さ、速さ。けれども、それでは説明のつかないことが、世界には沢山ある」

紙の上に、先生の白い指が走った。

「横軸を a と書こう。お金、肉体、技術、目に見える現実。縦軸を b と書こう。意識、徳、祈り、目に見えない現実。 $Z = a + bi$ — これが、一人の人間や、一つの文明の、本当の総量だ」

蒼太は紙を見つめた。

「神道では、見える世界を顕世(うつつしよ)、見えない世界を幽世(かくりよ)と言う。横軸と縦軸だ。掛け合わせた $a^2 + b^2$ こそが、その人の真の在り方だ。現世だけでも、霊界だけでも、人は本当の意味で在ることにならない。両者の交わりにおいて、初めて」

蒼太は思った。自分の矢印は、いつから横ばかり向くようになったのだろう。会社、業績、評価、収入。それらは確かに伸びてきた。けれども、上を見上げる時間を、自分はいつ失ったのだろう。

津久井先生は穏やかに続けた。

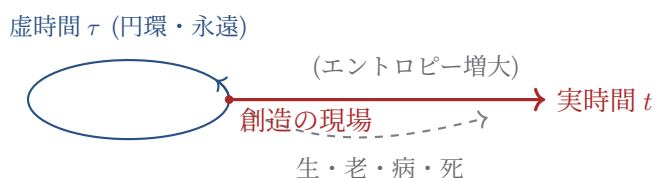
「人の生には、典型的な向きが四つある。横軸ばかり向いた者、つまり物量はあるが意味を欠いた者。これが現代人の多くだ。次に四十五度、物心両面が等しく充実した者。古来、調和と呼ばれてきた」

紙の上に先生は四つの矢印を描いた。

「縦軸ばかり向いた者は、内的に豊かだが現世的な力を欠く。山の中の隠者だ。最後に、横軸の負の方向に向いた者。物量はあるが向きが逆転している。これを退廃と呼ぶ」

「文明の崩壊期というのはね、振幅 r ばかり競っていた者が、ある日ふと向き θ を見失っていることに気づく時期だ。物量がいくらあっても、向きを失えば、それはやがて崩れる。今、世界はその場所にいる」

三 虚時間



〔挿絵二〕 虚時間の円環から、実時間の矢が立ち上がる

鳥居の影が、長く石段に伸びていた。海風がやみ、椿の落花が一輪、静かに足元に転がっていた。

「時間というものを、君は一本の直線だと思っているね。生まれて、生きて、死んでいく」

蒼太は頷いた。

「けれども物理学では、それと垂直なもう一つの時間を考えることがある。虚時間と呼ぶ。 $\tau = it$ 。実時間が直線で不可逆なら、虚時間は円環で永遠なのだ」

先生は紙の上に、今度は丸い輪と、そこから真横に伸びる矢印を描いた。

「実時間ではエントロピー、つまり乱雑さが増え続ける。コーヒーは冷め、人は老いる。けれども虚時間は閉じた輪だ。そこでは増えも減りもしない。神道で言う常世(とこよ)、仏教で言う涅槃。古来、東洋が直観してきたものを、二十世紀の物理学が、ホーキングという男の手で、ようやく数式で書き出したのだ」

先生は本殿を指した。茅葺きの古い社だった。

「神社というのはね、この虚時間との接続を保つために、人類が何千年もかけて磨いてきた装置なのだ。手を合わせるとは、円環の中の永遠に、ほんの一瞬、触れることだ。お祖父さんは、それを知っていた」

蒼太の胸の奥に、温かいものが、ゆっくりと広がった。

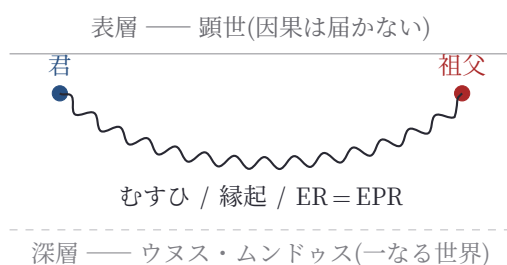
「ホーキングという男はね」と先生は静かに付け加えた。「宇宙の始まりに『時間』はなかったのだ、と言った。地球の南極点を考えてみたまえ。そこから『南』へ進むことはできない。『南』という方向自体が、そこで意味を失う。宇宙の始まりも、それと同じだ。虚時間が滑らかに閉じていて、『いつ始まったのか』という問い自体が消失する。これを彼は無境界仮説と呼んだ」

「古事記にも」と蒼太は思わず呟いた。「最初の三柱の神は『隠身(かくりみ)』だったと書いてあります」

先生は深く頷いた。

「隠身とは、虚時間に潜んだ状態だ。次に『萌騰(きざしのぼる)』と現れる。これが実時間の始まりだ。古代の日本人は、それを直観で書き残した。物理学が同じ場所に辿り着くまで、二千年かかった」

四 むすひ



〔挿絵 三〕 表面で離れて見えるものが、深層では一つに結ばれている

昼下がりの境内に、椿の落花がもう一輪、舞った。

「ER = EPR、と物理学者が呼んでいる仮説がある」と先生は言った。

「量子的にもつれた二つの粒子は、目に見えない極小のトンネルで時空的につながっている、というものだ。マルダセナとサスキンドという二人が、二〇一三年に出した。もしこれが本当なら、『縁』というものが、宇宙に幾何学的な実在として書き込まれている、ということになる」

蒼太は呟いた。「祖父との繋がりも、ですか」

先生は遠くを見た。

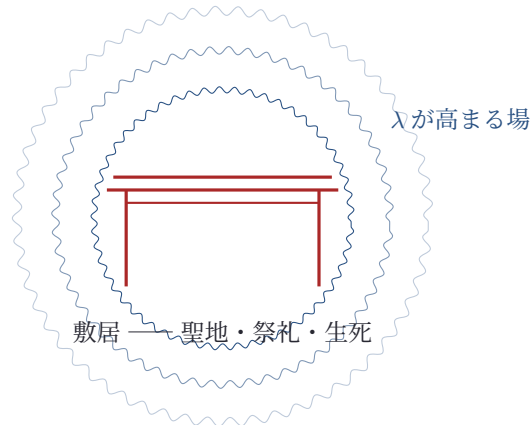
「物理的にどうかは、軽々しくは言えない。けれども、君が今日ここに足を運んだ——これは、何も無いところから生まれたものではないだろう。神道では『むすひ』と言う。古事記の冒頭に出てくる、高御産巢日と神産巢日。事物を結ぶ霊妙なる力。仏教は『縁起』と言う。ER = EPRの世界像と、見事に重なる」

「祖父は、よく言っていました。人と人は、見えない糸で結ばれているのだと」

「お祖父さんは、本物を知っていたのだよ」

蒼太の胸の奥で、小さな灯が、ぽっと点った。

五 開かれた点



〔挿絵四〕 「開かれた点」では、虚時間軸との結合 λ が局所的に高まる

「奇跡というものは、ある」と先生は言った。

「ヒュームのように、物理法則の侵犯と考えれば、奇跡は不可能になる。けれども複素平面全体の因果律の、虚部側からの発現と考えれば、可能になる。物理法則を破らない奇跡。トマス・アクィナスやアウグスティヌスが論じてきたのは、こちらの方だ」

蒼太は黙って聞いていた。

「聖地、神社、寺院、祭礼の時、聖人、生死の境。これらは古来、人が『敷居』と呼んできた場所だ。私はそれを λ と書く。虚時間軸との結合定数だ。 λ が高まる場所と時、奇跡は静かに、起きる」

「そして、近代以降、 λ は集団的に下がってきた。共同体の解体、伝統の希薄化、神社・寺院の機能低下、生死の医療化。奇跡が起きなくなったのではない。奇跡が起きにくい構造を、私たちが、自分たちの手で、作ってしまったのだ」

蒼太は石段の上から、遠くの海を見た。銀色に光っていた。

「先生、私のような者にも、何かできるでしょうか」

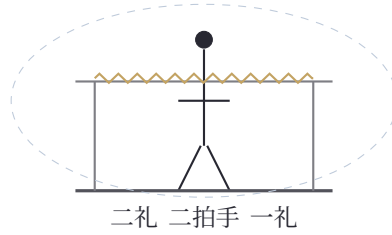
津久井先生は、初めて笑った。

「今日、ここに来た。それだけで、君の λ は少し回復した。それを、明日も、明後日も、続けることだ。手を合わせる一分。家族との食卓。森を歩く時間。季節の祭りに顔を出すこと。それらは古臭い形式ではない。 λ を維持する、人類の最も高度な技術なのだ。お祖父さんが君に遺したものでもある」

風が一阵、強く吹いた。本殿の鈴が、コーン、と小さく鳴った。

蒼太は、それが祖父の声のような気がした。

五の二 拝



〔挿絵 五〕 鈴の余韻 —— 一分の祈りが、 λ を回復する

蒼太は本殿の前に進み、賽銭箱に小銭を投じた。鈴の紐を引くと、コーン、と再び音が鳴った。先ほどよりも、深く澄んだ音だった。

二礼。二拍手。掌を合わせ、目を閉じた。

祖父の顔が浮かんだ。母の顔、妹の顔、会社の顔、満員電車の顔、確定申告の顔も、ぜんぶ浮かんで、ぜんぶ静かに沈んでいった。

残ったのは、ただ、この場所だった。本殿の屋根、椿の落花、海風、石段、そして津久井先生のあの紙。

一礼。

目を開けると、世界はほんの少し、明るくなったように感じられた。 λ が回復する、というのはこういうことなのだろうか、と蒼太は思った。先生は石段の途中で、こちらを見ていた。何も言わずに、ただ、頷いていた。

六 帰途



〔挿絵 六〕 振幅から位相へ —— 一人の青年の帰り道

日が傾いた。

蒼太は深く一礼して、石段を下り始めた。一段、また一段。背中に夕陽を浴びていた。ポケットの中に、津久井先生がくれた一枚の紙があった。 $Z = a + bi$ と書かれた、ただそれだけの紙だった。

祖父の一周忌は、終わった。けれども、何かが終わったのではなく、何かが始まったのだと、蒼太は感じていた。

複素平面の上で、自分の矢印は、確かに横ばかり向いていた。これからは、少しずつ、上へ

も傾けていこう。物量だけでなく、向きを。実部だけでなく、虚部を。 $\sqrt{a^2+b^2}$ —— 顕と幽の交わりにおいて、初めて、人は確かに在る。祖父はずっと、そう生きていたのだ。

明日からは、東京に戻る。けれども、何かが昨日までとは違う、と蒼太は思った。会社で、満員電車で、夜の食卓で、あの紙が、ポケットの中で、静かに自分を見つめてくれるだろう。θを整える、というのは、何か壮大な決意を要する話ではない。手を合わせる一分。家族と一緒に食事をする。森を歩くこと。それだけでよかった。それだけが、本当はずっと大切だったのだ。

社の方を振り返ると、本殿の屋根の上に、最初の星がひとつ、小さく光っていた。その光は、近代物理学が言うところの、遙か過去から届いた光だった。けれども蒼太には、それが祖父からの何かの合図のように思えた。もしも $ER=EPR$ が本当なら、と蒼太は思った。あの光と私の身体は、宇宙の生まれた瞬間に、たぶん本当に、結ばれていたのだ。

鳥居をくぐって、蒼太は家路についた。

風はもう、海ではなく、山から下りていた。山には、祖父の墓があった。